

## DMI 使用ガイドライン

作成年月日：2017年10月6日

作成者：Japan FRAC DMI 作業部会

対象とする有効成分：

作用機構	作用点とコード	グループ名	化学グループ名	有効成分名	農業名(例)	耐性リスク備考	FRACコード
G: 細胞膜のステロール生成	G1: ステロール生成におけるC14位の脱メチル化酵素	DMI-殺菌剤(脱メチル化阻害剤)(SBI: クラス I)	ピペラジン	トリホリン	サブロール	中 グループ内で耐性差が大きい。複数の病原菌において耐性が発生している。DMI間で交差耐性が発生しているとみなしたほうがよい。DMIと他のSBIは交差しない。	3
			ピリミジン	フェナリモル	ルビゲン		
			イミダゾール	オキシボコナゾールフマル酸塩	オーシャイン		
				ペフラゾエート	ヘルシード		
				プロクロラズ	スポルタック		
				トリフルミゾール	トリフミン		
			トリアゾール	シプロコナゾール	アルト		
				ジフェノコナゾール	スコア		
				フェンブコナゾール	インダー、デビュー		
				ヘキサコナゾール	アンビル		
				イミベンコナゾール	マネージ		
				イブコナゾール	テクリード		
				メコナゾール	リベロ、ワークアップ		
				ミクロブタニル	ラリー		
				プロビコナゾール	チルト		
			シメコナゾール	サンリット、モンガリット			
			テブコナゾール	シルバキュア、オンリーワン			
テトラコナゾール	サルバトーレ、ホクガード						

作物・病害別使用ガイドライン：

(以下の記載において「DMI 剤」とは、「DMI 単剤」および「DMI 混合剤」を示す。)

### 1. 麦類赤かび病

一般ガイドライン

- \*各薬剤の農薬登録の範囲（使用回数、希釈倍数、散布水量等）で使用する。
- \*予防的に使用する。
- \*DMI 剤は連続散布しない。
- \*作用機構の異なる殺菌剤と輪番で使用する。

### 2. ダイズ紫斑病

一般ガイドライン

- \*各薬剤の農薬登録の範囲（使用回数、希釈倍数、散布水量等）で使用する。
- \*予防的に使用する。
- \*DMI 剤は連続散布しない。
- \*作用機構の異なる殺菌剤と輪番で使用する。

### 3. 野菜類

#### (1) 散布回数

- \*DMI 剤の最大使用回数は、合計散布回数の3分の1までとする。

#### (2) 留意事項

- \*各薬剤の農薬登録の範囲（使用回数、希釈倍数、散布水量等）で使用する。
- \*予防的に使用する。

- \*DMI 剤は連続散布しない。
- \*作用機構の異なる殺菌剤と輪番で使用する。
- \*次作においても、前作からの輪番使用を継続する。

#### 4. リンゴ・ナシ黒星病

##### (1) 散布回数

下記の病害を対象とする場合は、重点防除時期における散布回数を以下のガイドライン表のとおりとする。

病害	重点防除時期における DMI 単剤の最多散布回数	重点防除時期における DMI 混合剤の最多散布回数
リンゴ黒星病	1	2
ナシ黒星病	2	2

##### (2) 留意事項

- \*各薬剤の農薬登録の範囲（使用回数、希釈倍数、散布水量等）で使用する。
- \*予防的に使用する。
- \*DMI 剤は連続散布しない。
- \*単剤と混合剤を併用する場合は、混合剤の散布回数に従う。
- \*作用機構の異なる殺菌剤と輪番で使用する。

#### 5. てんさい

##### (1) 散布回数

\*DMI 剤の最大使用回数は、合計散布回数の3分の1までとする。

##### (2) 留意事項

- \*各薬剤の農薬登録の範囲（使用回数、希釈倍数、散布水量等）で使用する。
- \*予防的に使用する。
- \*DMI 剤は連続散布しない。
- \*作用機構の異なる殺菌剤と輪番で使用する。

#### 注意事項：

- \*本ガイドラインは、耐性菌の発生遅延化を目的としています。
- \*本ガイドラインは、使用する圃場において既に耐性菌が発生している病害には適用しません。

以 上